

フィールドワークと研究者

渡邊 祥子

『マクリブ現代史』

●フィールドに行く前に

フィールドワークは地域研究者にとって最も重要な現地との関わりである。アジ研の多くの研究者のように、研究者が調査対象地から地理的にも文化的にも遠い出自である場合は特に、現場に行くこと、その土地の人々の考え方を知り言葉や文化に触れることは、研究作業を行ううえで欠かせない修煉となる。研究者はかくしてフィールドに行く。しかし現地の人たちに、研究者という珍客はどのように映っているのだろうか。

宮本常一・安溪遊地『調査される前に読むでおく本』（みずのわ出版、二〇〇八年）には、異文化から学ぶ立場の研究者にとって耳に痛い話が満載だ。そこで語られているのは、突然押し掛けてきて資料をあさり、時には奪い、イン

タビューと称して話を聞かずに自分の聞きたいことだけを詰問し、礼だけ言っただけで去っていく「バカセ」たちの所業と、それに傷ついたり、迷惑したりした人々の体験である。研究者が自らを研究という高尚な目的を追求する聖人だと思いきも、地域の価値観やルールを尊重せず、協力してくれ

る人々を単に「インフォーマント」として一方的に利用する時、こうした篡奪^{さんだつ}は起こる。また逆に、地域に関わり過ぎてしまった研究者の失敗にも触れられている。良かれと思っただけの提言がきっかけで、西表島のヤマネコ印無農薬米を販売する事業を引き受ける羽目になった安溪氏は、「よそから持ってきた智慧や文化で、地域が本当に生き延びられるわけがない」（四八ページ）という批判に出会う。島とは無縁の価値観や方

法を地域に押し付けたことで、地域の自立を妨げてしまった側面に気付くのである。

●フィールドと向き合って

フィールドといかに関係をつ結び、人々の抱えている問題や、そのものの見方や、その感情に向き合っていくのか。こうした問いは学問の外にあるものと捉えられがちだが、実は学問と深くつながっている。それぞれどこか、学問そのものでさえある。保莉実『フデイカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践——』（御茶の水書房、二〇〇四年）は、フィールドに真摯に向き合った若き研究者による、野心的な学問業績であり、挑戦的な実践の記録だ。オーストラリアのアボリジニが口承で伝える歴史を研究する保莉氏は、自身の専門

を人類学ではなく歴史学であると言う。文字のない人々の歴史も歴史であり、イギリス人入植の際に白人たちが書き残した「科学的」クロノロジーとアボリジニのオーラル・ヒストリーは、同じ資格で歴史の記録であるべきだという考えからである。しかし、今日の実証主義歴史学では、事実を証拠によって特定する作業が規範とされる。また、史実には論理的整合性がなければならず、反証性が必要であるとされる点は社会科学と同様である。「よく実証された」事実関係の主張とそうでない事実関係の主張が矛盾しあうとき、歴史学者は実証の不十分な事実関係の主張を排除し、「よく実証された」ものだけを史実として認定する。こうした選別の作業のなかで、アボリジニの長老が伝える「史実」は非科学的な言説として排除されてしまう。それは例えば、オーストラリアに植民地主義をもたらした白人は、アボリジニと起源を共有しない「猿」から進化したものであるとか、一九二四年にウエーブヒル牧場でおこった大洪水は、アボリジニ男性が雨をつかさどる大蛇に降水を依頼したからだとかいった「史実」である。歴史

学者たちはこうした逸話を荒唐無稽なものとして排除するか、「史実」とは異なる「神話」として包摂してしまふ。

保莉氏の歴史学は、研究者たちの特権的地位への疑問を徹底的に突き詰めることから始まる。目指すところは、「歴史構築のエンジエントとしての『われわれ歴史学者』を強固に保持する努力をあえて放棄してみろという作業」であり、「いったん、僕らのエンジエーションをカッコでくくって、かれらのほうにエンジエーションを預けたときに、いったい何がおこるか」(一八ページ)を見る試みである。実証主義歴史学がお墨付きを与える史実と、アポリジニが日々実践している、ローカル化され、超自然的な歴史との間の「対話」を模索することこそ、保莉氏の提唱するクロス・カルチュラルイジング・ヒストリーである。

●フィールドの後に

保莉氏の著作に私たちが見出す知的刺激は、オーストラリアという土地の持っている豊かで多元的な歴史と、著者の才能との出会いによって生み出された、ユニークなものだと読者は思うかもしれない。

しかし、「クロス・カルチュラルイジング」行為そのものは、フィールドと関わっている者すべてが日常的に経験しているのではない。ほとんどの研究者は、仮説検証のためにフィールドに赴く。

しかしながら、フィールドでの経験は大概、研究者が机上でこしらえた予見を裏切るものである。研究者はこのギャップに苦しみ、それについて考え、それを乗り越えるべく知的努力を行う。また、ある人たちの「信仰」や「神話」を調べていたら、それらが「研究対象」を超えて身に迫ってきたという、「ミイラ取りがミイラになる」経験も、少なからぬ研究者が持つだろう。しかし、狭い井戸のなかの蛙である研究者の世界とフィールドの広大な世界が、非対称的な関係から抜け出て共振するような経験は、保莉氏の書など少数の研究を例外として、普通論文には書かれることのない部分である。

川田順造『マグレブ紀行』(中公新書、一九九九「一九七一年」)

は、サブサハラ・アフリカをフィールドとする人類学者による著書である。フィールドとの出会いが引き起こした生々しい体験の痕跡を、このエッセイに見ること

ができる。この文章が学術論文でなく旅行記であり、しかも著者の本来の専門ではない地域(マグレブ、つまりアルジェリア、チュニジア、モロッコ)を主題にするものであったことは、著者の想像力あふれる自由な筆致とおそらく無関係ではないだろう。川田氏は、

学問の窮屈さから相対的に解放された目でフィールドをめぐり、人々と話しあい、男たち女たち老人たち子どもたちの様子を、明晰な日本語と自筆の美しいイラストでスケッチしている。

考察の一部分はたしかに、書物から得られた知識に基づいており、実証的なアジア・アフリカ研究の発展という当時の社会科学の文脈を受けた理論的な考察である。しかしながら、著者のひらめきや感想が書き留められている箇所こそがこの本の魅力である。たとえば川田氏は、マグレブの人たちの文化的な特徴を表すしぐさとして、

驚いて眉を上げたときにできる「額の横じわ」を挙げています。また川田氏が「アルジェに暮らすあいだ、こうした人たちと親しくなるにつれて、ゲリラと市街戦と、テロと虐殺の八年間の戦い」(注…アルジェリア独立戦争のこと)の

熾烈さを、このおだやかで控えぬな人たちからは、どうしても想像できなかったが、しかしこの人たちが勝ったのは、当然だったと思つた」(一一―一二ページ)と書くとき、私たちは川田氏の学問的考察というよりは、その生きた直接的な経験へと導かれる。

マグレブ周遊の長い旅の終わり、モロッコのテトウアンからセウタ(モロッコにあるスペイン領の飛び地)に抜けて、町の教会で血まみれの聖母子像(ピエタ)をみた川田氏の感想は、なかでも奇妙である。「なんといえればよいか、まず一目みて、ひどく気味が悪かった。清楚な幾何学模様には飾られた、明るく風通しのいい、中庭にいつも泉水から清水があふれているイスラム寺院に親しんだあとでは、ピエタ像の崇拜は「ひどく迷信深いものに思われた」。そして「偶像を拜む「異教徒」の国に、とうとう足をふみ入れたな、というのが、素朴な第一印象だった」(一五九―一六〇ページ)。「フィールド後」の研究者の変貌した身体感覚が、ここに現れている。

(わたなべ しょうこ/アジア経済研究所 中東研究グループ)